

Organic Design Inc.

オーガニックデザイン一級建築士事務所／熊木英雄



オーガニックデザイン一級建築士事務所では、建築を多角的な視点から捉え、設計を行っています。特に大切にしているのが、人が過ごす空間・感情といったミクロな視点と、地域や社会といったマクロな視点、内と外の境界についての視点です。

ミクロな視点では、空間にいる人にとってどのような体験が生まれるかを重視しています。たとえば、カーブした壁が生み出す光のグラデーションや、パラメトリックデザインによる流動的でダイナミックな空間は、時間の移ろいや感情の変化と呼応し、心地よさや高揚感といった感覚を生み出すものだと考えています。

一方、マクロな視点では、「まちの縁側」「まちのポケット」「地域の場の記憶」といったテーマを手がかりに、まちの歴史・現状・未来のコンテクストを丁寧に読み取り、その土地に潜むポテンシャルや隠れた価値を引き出しながら、地域や社会がより良く発展していくためにはどのような建築が必要かを考えます。そして、建築空間や素材の選択など一見地味に思えるプロセスも、確かなデザインへつなげていきます。

そして、建物の内と外、敷地の内と外といった境界については、それを物理的・心理的に透明化し、曖昧にすることで、人と人、建物と周囲の環境との間に自然な関係性が育まれる空間づくりをめざしています。

こうした視点を重ね合わせることで、建築が単なる「モノ」ではなく、人や社会との関係性を育てる「場」となることをめざし、日々の設計に取り組んでいます。

撮影：蝦名まゆこ

ミドリノカーテンのイエ



この住宅の設計では、まちや外部の関係性から設計から始まり、ひいては内部の空間領域の工夫とうまくつながるように設計を心がけた。この街区にはもともとバラ畑があり、それを楽しみにしている地域の人たちもいた。彼らが同じようにこの場所を通る楽しみを持てるような場所性を踏襲し、従来通り地域の人が足を留めて草木やバラを楽しめる庭と建物の「建ち方」を考慮した。環境的にパッシブソーラーを考え、敷地外から風を庭に引込み、

庭からの「風」が緑のカーテンのフィルター越しに蒸散効果による涼しい風に変換されながら室内に吹き込まれるような工夫を考慮した。建物をカーブに曲げることで風が室内に取り込みやすく、内部でも風通しが行き渡るようにプランニングした。実際にミドリノカーテンがある場合といふ場合では室内温度が10度以上異なってくることも検証できた。

日常の生活でリビングと外部テラスがつながれ、アウトドアリビングが内外にわたり空間がつながるように設計を意識した。



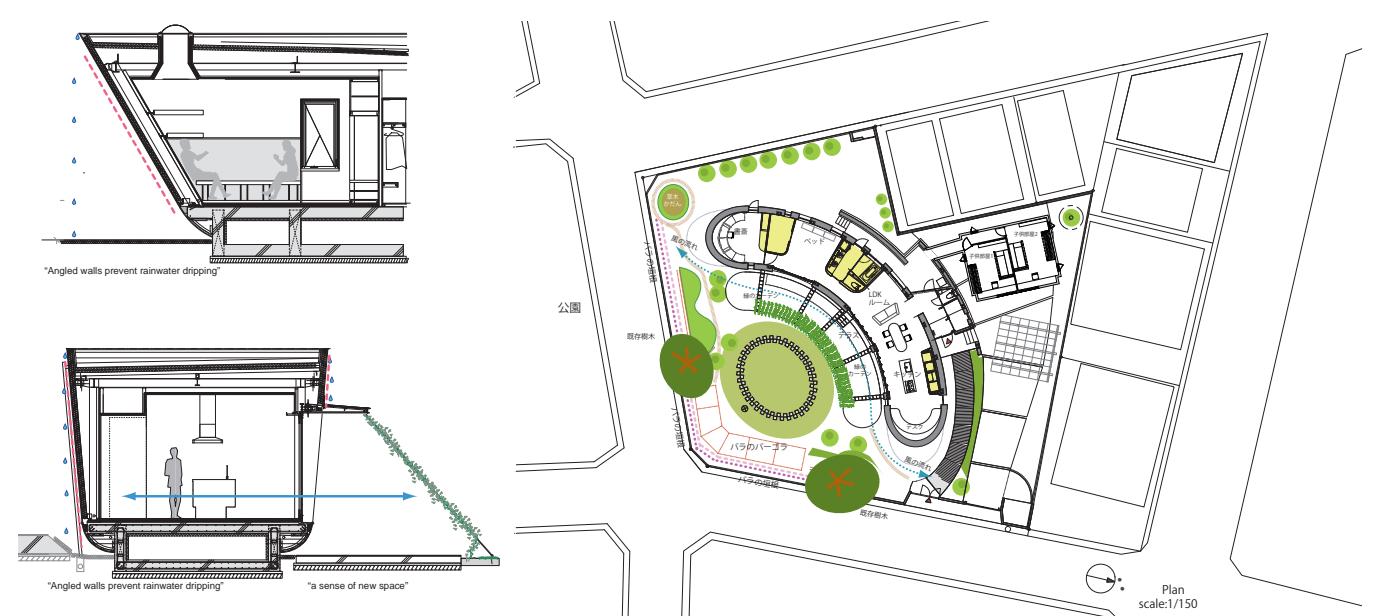
インテリアの領域性

空間が、ストレートな壁で構成されると、心理的にその空間の利用を想定した領域性が輪郭形成されがちである。例えば四角い壁に囲われた部屋があり、机や家具が並ぶと心理的に通路部と机・家具部の「領域性」を心理的に区分けてしまう傾向がある。

一方で、カーブしている壁で構成されると、「通路部」という区分輪郭が心理的に形成されにくく、空間全部を1スペース(1部屋)として認知する。

つまり、そういった「心理的な領域別け」を薄めるため、「カーブの壁」を採用することにより、領域と領域に一体性をもたせ、2領域を1空間と感じられるように配慮し、通路(廊下)との区分けがない、一体としての空間認識ができるような設計をチャレンジした。

そして、加えれば外部のミドリノカーテンを利用し多様な空間認識を生み出しており、通常の室内的広さよりも、外部の空間も取り込んでいるように心理的に感じられる広さ感を得られている。これもカーブの壁が「心理的な領域別け」を薄める効果があるからだと感じた。



ミドリノカーテンのイエ 所在地：埼玉県戸田市
建築主：個人／用途：住宅／施工：磯コラム・渡辺産業／構造：S造 地上1階／敷地面積：600m²／延床面積：177m²
竣工：2011年（新築）／撮影：岡村享則

まちの縁側 エンハコビル（縁箱ビル）

エンハコ(縁箱)ビルは、住宅エリアと商業・官公庁エリアの境界に位置し、人々が行き交う動線上に「一休みできる縁側」のような役割を担う地域拠点として計画された。大規模な人流はないものの、平日は、高齢者、主婦、子供たちがスーパー や カフェ、学習塾などへさまざまな目的でこの上記2エリアの境界を往来する。休日は、ファミリーが市役所駐車場で行われる「朝市」に出かけ、大きな公園で過ごし、カフェやファミレスで食事をしながら、住居エリアに戻っていく。確実に地域住民の移動が発生していることに着目し、道なりに縁側(立体縁側のバルコニー)を設け、木質感かつ有機的な形をした軒下をつくることで、住人が近づきたい、建物側も手を差し伸べているかのようにし、最終的にそれがこのビルのデザインを担っている。



エンハコビル（工事名称：文化前プロジェクト）所在地：埼玉県戸田市／建築主：個人／用途：店舗／施工：群峰アクシア／構造・規模／S造 地上3階
敷地面積：490m² 延床面積：785m²／竣工：2022年／撮影：岡村享則

くぼみアパートメント まちのポケット



めざしたことは「単身者同士が同じ屋根の下でお互いを気遣いながら生活ができる」また、「住人同士でコミュニケーションが取れ、孤立しないような住戸の関係づくり」とした。

期せずして「孤立してしまう」ことは、さまざまな社会的問題の要因となっている。孤独死や助けを呼べない無関心な近隣関係などの問題はもちろん、昨今のやるせない事件の中には、話し相手があれば回避できたかもしれない妄想などの一人歩きによる。

こののような社会問題を考慮し、まちの住環境にも、他人と挨拶ができる、話すきっかけができる場を持つ計画を考えた。

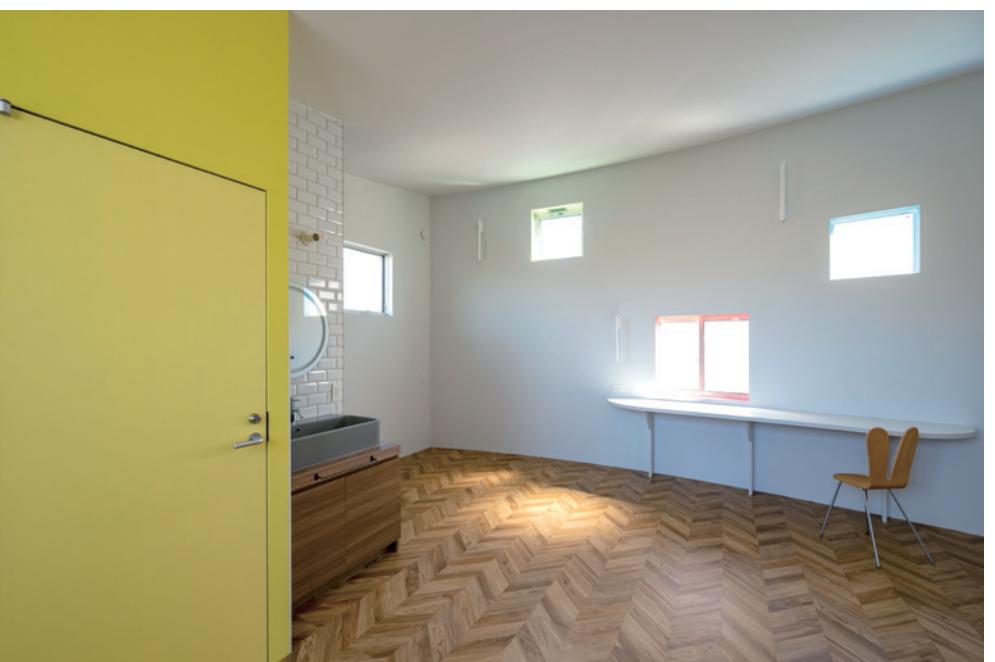
オーソドックスではあるが、住人同士が語らえる場として中庭を中央に囲う形を提案した。この中庭が、住人だけでなく街の人とも繋がり合える、「単身の孤立」から「つながり」へと変換できるような空間となることをめざし模索した。

本計画がコロナ禍の2020年8月から始まったこともあり、単身者の暮らしのあり方や生活習慣、そして「シェアすること」について考えを巡らせ、シェアの仕方にも配慮し、程よい距離感、近づきすぎず遠すぎずの関係を模索した。同じ音でも知り合いが出している

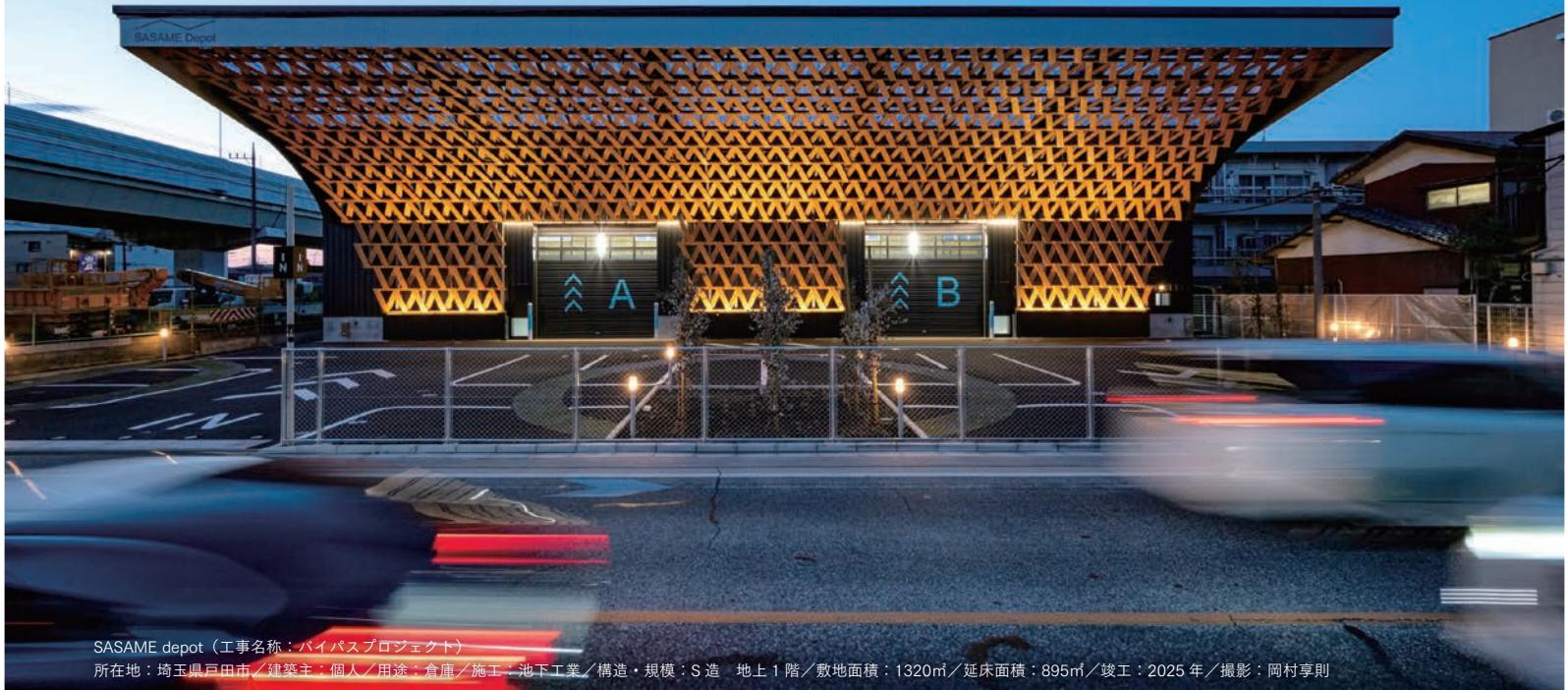
音と、見ず知らずの人が出している音では、心理的に音に対するイライラ度が異なる。また人間関係でいえば、うまくいっているときのシェアは大変効果的で希望に満ち溢れているが、一旦うまくいかなくなったり価値観が共有できない人のシェアは、心理的にかなりの苦痛な空間に変容する。それゆえ、今回は個人が選択して中庭の共有スペースに行けるつながりを設定し、挨拶のきっかけができるようにし、郵便ポストは1か所にまとめて情報ボードも絡めて、コミュニケーションを促すという計画に抑えた。

住人同士だけでなく街の人ともコミュニケーションを図れるよう、中庭は人々が入ってきやすい形状を検討した。そこで、建物を2棟に別けて中庭を構成し、壁面をカーブさせることで、人が近づき、スリップインしたくなるような「道路からのくぼみ」をつくった。加えて、道路と中庭のアスファルトが一体化して見えるように仕上げることで、より一層「くぼみ」に人々が公道のように入りやすく集まりやすくなるよう工夫した。

街の住環境に、人々が互いに気遣える仕組みを組みこみ、画一的で隣人に無関心な社会を打破する一助になることを願っている。



くぼみアパートメント 上戸田
所在地 埼玉県戸田市
建築主 個人
用途 共同住宅
施工 碇コラム・渡辺産業
構造・規模 W造 地上2階
敷地面積 330m²
延床面積 356m²
竣工 2023年
撮影 岡村享則



SASAME depot (工事名称：バイパスプロジェクト)

所在地：埼玉県戸田市／建築主：個人／用途：倉庫／施工：池下工業／構造・規模：S造 地上1階／敷地面積：1320m²／延床面積：895m²／竣工：2025年／撮影：岡村享則

市民の場の記憶として

本プロジェクトでは、これまでの倉庫建物の様相を継承しつつ、市民の心に残る故郷の風景を創出することを目指した。具体的には、温もりや親しみを感じさせる杉材を使用した木組みを採用し、新たな故郷の景色として記憶に残るシンボルを目指している。この木組みは、荷解き場に木漏れ日をもたらし、明るさ調節とともに柔らかな印象を与える効果も考慮されている。

地域への誇りを取り戻す

かつて、倉庫群は殺風景な街並みとして市民に捉えられていた。しかし近年では、大手EC企業の進出や東京への翌日配送を可能にする社会インフラとして、倉庫の役割が再認識されている。本デザインでは、市民が倉庫の景観を「無関心なもの」として捉えるのではなく、地域の景観を積極的に捉え、親しみを感じられるよう配慮した。木材の温もりを取り入れたデザインにより、地域へ新たな価値を提供している。

工場・倉庫に木材の温もりを与える意義
工場や倉庫は、ビジネス上の費用対効果を重視して設計されることが多く、それゆえ殺風景なまち並み形成の一因となってきた。しかし、木材を外装の主素材として使用することで、無機質で排他的な印象の工場・倉庫に、温もりや親しみを感じさせるデザインを実現した。この建物が地域の資産となり、次世代に渡せるまちの景色となることを期待している。

